

芦屋大学論叢 第83号  
(令和7年3月21日)抜刷

《研究ノート》

青年期の特徴と大学における看護教育の今後の課題

—看護基礎教育における健康教育に注目して—

原 田 江梨子  
岩 城 晶 子  
阪 本 美 江



## 《研究ノート》

### 青年期の特徴と大学における看護教育の今後の課題

#### —看護基礎教育における健康教育に注目して—

原 田 江梨子 (1)

岩 城 晶 子 (2)

阪 本 美 江 (3)

(1)芦屋大学大学院教育学研究科博士後期課程

/ 宝塚大学 看護学部

(2)宝塚大学 看護学部

(3)芦屋大学臨床教育学部

#### 1. はじめに

青年期とは、小児が自立して成人に成長する時期をいい、身体的機能が発揮されるとともに、生活環境の変化に伴う精神的変容を要する時期である。鈴木<sup>1)</sup>は、「青年期は生涯を健康に生きるための基盤づくりの時期であり、この時期に自らの健康管理に対する関心を高め、好ましい健康習慣を獲得することが課題であり、健康自己管理能力を習得する時期として望ましい」と述べている。そのため、生涯を通じて健康な状態で過ごすための生活習慣および環境の変化に対応する能力を習得する時期であるといえる。また、大学等の高等教育機関において、好ましい健康習慣を獲得すること、自己の健康管理力を高めることは、学業を遂行することと並行して重要な課題であると考えられる。

宮坂<sup>2)</sup>は、健康教育を「個人、家族、集団または地域が直面している健康問題を解決するにあたって、自ら必要な知識を獲得して、必要な意志決定ができるように、直面している問題に自ら積極的に取り組む実行力を身につけることができるよう援助することである」と定義している。また、身体的および精神的の健康を保つため、適度な「運動」、バランスのとれた「栄養摂取と食生活」、心身の疲労回復と充実した人生を目指すための「休養（休息）の確保」を身体的健康に欠かせない要素とし、休養（休息）を確保して充足してストレスを解消して精神的健康を保持するために欠かせない要素としている。このことから、健康教育の目標は、「健康課題や日々生じる健康課題を解決していく能力や資質を習得し、生涯を通して健康で安全な生活を送ることができるようとする」ことであるといえる。

岡田<sup>3)</sup>は、大学生の健康に関する意識並びに実態に関する調査を行い、「『食』『睡眠』『運動』『健康に関する知識の理解度』『個人でできる健康意識』の因子は互いに影響をおよぼしていたが、『心の健康の実態』はどの要因とも関連がなかった」と述べている。また、木村<sup>4)</sup>は、大学生の健康関連行動とライフスキルとの関連を明らかにするための教育プログラム開発の基礎的資料を得るために調査を行った結果、「ライフスキルを高めることは、ポジティブな健康行動、および効果的な学修活動を促すことにつながることを示唆しており、ライフスキル向上のための教育プログラマ開発は、高等教育機関に求める『社会人基礎力』『学士力』の形成に寄与する」と述べていた。これらの健康教育に関する研究に取り組んだ結果から明らかになつたことは、大学生が自らの健康管理を適切に行い、身体的・精神的健康を保持するためには、ライフスキル向上のための教育が重要である。

論者は現在、看護大学において看護大学生の育成に携わっている立場から、(看護大学生の) 健康自己管理教育のあり方についての調査および研究に取り組んでいる<sup>5) 6) 7) 8)</sup>。看護職になるための教育機関で行われる専門職を育成する看護基礎教育では、科学的な根拠に基づいた看護に関する知識に基づいて実践できる能力を養うとともに、看護者としての責務を自覚し、倫理的判断に基づく実践能力の育成が目指されている。つまり、看護職になるための教育機関では、看護職を志向する者に対して、看護学の体系に則って展開される教授学習過程が主体になっている一方で、看護の初学者である学生自身の健康に関する教育・健康自己管理に関する教育は希薄であるといえる。

WHO (World Health Organization)<sup>注2)</sup> 憲章においては、〈健康〉はどのように定義づけられているのか。「(健康とは) 病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、社会的にも、すべてが満たされた状態にあること」と定義されている<sup>9)</sup>が、時代や環境に即して健康の定義は変化する。また、ライフスキルを「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」であり、人間個々によりよく生きるために必要な技術・能力、生活技能の習得が健康に過ごすために必要な能力であるとされている<sup>10)</sup>。さらに、対象自らが健康を維持するためには、日常生活の中で生じた問題に対処する能力の習得が重要であるといえる。

以上のことから、看護基礎教育における健康教育のあり方について、大学における看護学生に対する支援方法に関する課題を究明する上で、青年期の特徴を把握して教育を遂行する必要があると考えられる。このことから、本稿では、代表的な理論家の発達理論を通じて青年期の特徴について概観し、看護基礎教育における健康教育のあり方について示唆をえることにした。

## 2. 代表的な理論家の発達理論の概要からみた青年期の特徴

発達段階とは、子どもが成長して成熟することに伴う、身体的・精神的・感情的な段階のことをいう。心理的・身体的発達が生涯にわたってどのように変容していくか、その過程について異なる見解が存在する。そのうち、本稿で注目する大学生の多くは青年期後期に該当し、学生から社会人に移行する時期にあるといわれている。そこで大学の多くは、就学している教育機関での学修を通して、問題解決能力およびクオリティシングのスキルを獲得し、自らの所属する社会のニーズに反映させて貢献する社会的役割を担っているといえる。

エリクソンやハヴィガーストが「発達課題」を論じており、ハヴィガーストの発達課題の内容は教育学的視点、エリクソンは自我の発達段階と発達課題を心的・社会的な視点、内面的な成長に注目して論じている。そこで、青年期以降の発達段階に注目した代表的な理論家、ハヴィガースト、エリクソンが論じた概要について記述した。そして、青年期のこころの発達、自己愛の重要性を強調し、自己肯定感や自己実現の重要性を説き、人間の成長や発展を促すことに注目した、コフートの理論に注目することにした。

### 2.1 ハヴィガーストによる青年期にある対象の特徴

ロバート・ジェームズ・ハヴィガースト<sup>注3)</sup> (Robert James Havighurst 1900年-1991年) は、社会的に適応し人格を形成するうえで、各発達段階で達成しておくべき社会的・心理的課題に注目し、最初に発達課題の概念を提唱した。

乳児期・児童初期から高齢期までに人生の段階を区分し、社会的役割や習得すべき身体的技量などを段

階ごとに具体的項目として示した。この段階ごとに示された具体的な項目内容は、社会の文化的要請、身体的成熟、個人の価値観や要望の中のどれかが源泉となっていると論じた。

対象は大学時代入学当初の時期を青年期後期、在学中は成人早期に該当する。そこで、青年期と成人前期の発達課題を抽出して整理した内容を表1に示した。

表1 ハヴィィガーストによる青年期と成人早期の特徴

青年期の発達課題	成人早期の発達課題
同世代の男女の友人と新しい成熟した人間関係を結ぶ	配偶者を選ぶ
男性・女性としての社会的役割を習得する	結婚した相手と一緒に生活して育子とを学ぶ
自分の身体的变化を受け入れ、有効に使う	家庭を形成する
両親や大人の他者から情緒的に独立する	子供を育てる
結婚と家庭生活の準備をする	家庭を管理する
職業に就く準備をする	職業生活をスタートする
行動の指針としての価値観や倫理体系を習得する	市民としての責任を引き受ける
社会人として責任ある行動をとる	気の合う社交グループを見つけだす

R.J.ハヴィィガースト、児玉憲典訳、ハヴィィガースとの発達課題と教育より抜粋して論者が整理 2024

青年期後期の多くは大学生であるため、学業修了後、「大学」という環境、「学生」という立場を離れ、今後どうするのかを、選択しなければならない状況にある。そこで、「どんな人間でどう生きていくか」という問いに答えを出す必要が生じる、人生の節目として取り組まざるを得ない時期と考えられる。この問いに向き合うことで葛藤が生まれる。対象自らのやりたいことに気づき、「独立」という心理的 requirement が発生する時期である。また、学生生活や人間関係の中で経験した葛藤は、人を信頼する「共感」や期待した回答が得られない「不信感」、傷つき裏切られたと感じて他者を信じられなくなる感情をうむことになる。葛藤に向かい悩むことが、青年期の発達課題を乗り越え、成人早期に円滑に移行するうえで克服すべき重要な課題であるといえる。

### 2.3 エリクソンによる青年期の特徴

エリクソン<sup>注4)</sup> (Homburger Erikson) (1902年-1994年)は発達心理学者であり、精神分析家でもある。「アイデンティティ」の概念、心理社会的発達理論を提唱した。

エリクソンは、乳児期から老年期まで人の発達が一生続くという「生涯発達」を唱え、発達段階のそれにおいて取り組むべき発達課題があるとした。8つの段階に分け、それぞれにおいて社会・文化的に期待されている心理社会的な発達課題を示した。

エリクソンは、フロイトの精神・性的な観点に精神社会的な観点を加え、対象関係の視点を導入し、人間の心理は周囲の人々との相互作用を通して成長していく点、アイデンティティの確率、自立に注目し、人間には生涯に8つの発達段階があると考えた。

エリクソンの唱えるアイデンティティについてふれておきたい。アイデンティティとは、自我と対象との関係の漸成説を基礎としてエリクソンが造出した概念である。青年期である13歳から22歳ころの心理社

会的危機をアイデンティティ対アイデンティティの混乱とし、自分を客観視でき、自分は何者かと考えるようになること、自分の本質や他者との違いを知ることにより、アイデンティティを確立し、仲間から認められることで、自らを自覚でき、自分らしさに忠実に生きようとする「忠誠」の力を獲得するとしている。

一方、母親との関係、両親との関係、友人・仲間集団との関係など、ライフサイクルに重要な対象との対象関係を発達段階に準じて、達成されるべき精神・社会的パーソナリティ特徴のテーマをあげ、上手く達成されなかつた時に陰性の状態に陥るとした。そして各発達段階に「心理社会的危機」が存在し、課題達成により要素「力」を獲得できる。心理的課題は、生涯どの時期においても発達し、心理社会的危機を乗り越えることができると思った。

これらのことから、大学において看護基礎教育を受けている青年後期は、思春期が心理・生物学的な規定要因が強いのに対し、心理社会的な規定要因が増す時期である。思春期において身体的な発達課題をほぼ達成し、自律し始め、自己の再構築、パーソナリティの再編成を推し進め、社会の中での自分の役割や位置づけについての自覚を試行錯誤しながらみいだしていく。つまり、この世で何をするべきであるか、貢献できることがあるかという問いかと、何者であるのか、何のために生きて行くのか、という実存的な自己意識であり、自意識の形成についてアイデンティティの概念をつくる、青年後期以降の価値観を形成する重要な時期にあるといえる。

#### 2.4 ハインツ・コフートによる青年期の特徴

ハインツ・コフート<sup>注5)</sup> (Heinz Kohut) (1913年-1981年)は精神科医、精神分析学者であり、自己愛性パーソナリティ障害の研究に取り組み、自己心理学という独自の理論を提唱した。自己心理学とは、人間の自己や人格は社会的かつ文化的な要因によって形成されると考え、人間の自己や人格を中心とした心理学である。

自己心理学では、「自己」と「自己対象」という重要な二つの概念があると論じている。自己とは人間の心理的な中核で、自分自身の感覚や認識をいい、生まれつきではなく、人間の人格や行動の基盤となり、生涯にわたって発達するものをいい、自己対象とは、自己の発達に必要な心理的な機能を果たす人や物のこと、自己に対して共感的であり、自己のニーズや欲求に応えてくれるものであるとした。

この概念に基づいて、コフートは、自己に対して鏡像化、理想化、双子性のタイプの反応に分けている。鏡像化は自己対象が自己の感情や表現を反映し、肯定し、賞賛する反応、鏡像化によって、自己は自分が大切で価値があると感じる。理想化は自己対象が自己にとって尊敬や憧れの対象であり、力や知恵を持っていると感じられる反応、理想化によって、自己は安心感や信頼感を得る。双子性は自己対象が自己と似ているか、共通点があると感じられる反応、自己は帰属感や同一性を得る。コフートは、自己対象が心理的な発達において重要な役割を果たす、自己対象が不十分であったり、不適切であったりすると、自己の発達に障害が生じると考えた。

現代の日本において、青年期にある対象は、自らの価値観が形成されておらず、主体性に乏しく、他者からの支援が自らの価値観や意向となる場合、傷つきやすく、病的なナルシシズムに陥りやすいといえる。つまり、ハヴィガーストの唱える、青年期にあり、身体的発達課題を満たしている対象も、エリクソンの唱える発達課題に達成していない、コフートの唱える自己愛が形成されていない、もしくは偏った自己愛もしくは病的なナルシシズムに移行しやすい、揺れる時期にある特徴を明示しているといえる。

### 3. 青年期にある大学生の特徴と看護基礎育における健康教育の課題

以上、青年期の特徴を踏まえて、本章では青年期にある大学生の特徴を概観しつつ、看護基礎教育の現状と課題について考察していく。

#### 3.1 青年期にある大学生の特徴

青年期は、「18歳で成人」とされる国が多く、世界の成人年齢は18歳が一般的である。日本では、世界の成人年齢に合わせる目的もあり、2022年4月1日から、成年年齢が20歳から18歳に変更され、18歳に引き下げられたことによる青年期にある対象に対する教育の課題について述べる。

民法が定める成年の年齢は、親の同意を得ることなく、自分の意思で様々な契約ができるようになる18歳へと変更になり、「人の発育」を基に政治年齢を定めたが、20歳である必然性があったわけではない。このように、若者の成熟度に対する認識が、法によって根拠の解釈を招いて異なる可能性があり、18歳から20歳の成熟度の見方は曖昧な状況にあるといえる。

また、成年になっても、健康面への影響や非行防止、青少年保護等の観点から、飲酒や喫煙、公営競技に関する年齢制限を20歳として成年年齢が20歳に維持されたため、矛盾が生じることとなった。そこで、社会経験に乏しく、保護がなくなったばかりの成年期にある対象のトラブルが生じる危険が高くなつたともいえる。加えて、現代の若者の早熟化について、法務省は戦後の若者の体位の向上や性の早熟化を例に、戦前に比べて現代の若者の成長が早く、18歳になれば大人並みだと捉えている。加えて、修学期間の延長が、知的水準の向上や知的成熟をもたらしていると認識し、現在では修学期間の延長は成人期にある対象の未熟化をもたらすものと指摘されている点で、時代背景による捉え方の相違を論じている。

他方、身体的成熟と精神的成熟との側面から、18歳は身体的、性的な面での成長・成熟が進んでいるにもかかわらず、精神的・社会的な面での成長および成熟が伴わないアンバランスな状態とみなし、非行増加の重要な原因とする見解を示している。

今日の日本では、大学で教育（高等教育）をうける対象の多くは18-19歳である。この時期は、ハヴィガーストの発達段階においては、身体的に成熟した時期であり、社会的に自立し、配偶者を選択して新たな生活を開始する準備段階にあるといえる。一方で、エリクソンの発達論でいう、自己のアイデンティティを形成する作業の途上にあるといえる。また、コフートの唱える自己心理学においては、自己愛の形成途上にあるとされる。

このような発達段階にある学生を対象とする大学教育は、その身体的成熟と精神的成熟の固有で特徴的な発達段階に有効に対応した教育がなされなければならない。その点から、青年期にある学生が、自己の心身を対象化するための大学においても重要な教育課題であると考えられる。しかしながら、そうした教育の必要性と重要性について、今日、大学教育に携わる者において、必ずしも十分な認識があるとはいえない。高等教育において就学する学生を対象にした健康教育に関する研究は、高等学校までの教育を受ける対象に対する健康教育と比較すると等閑視されているといつても過言ではない。

本稿で問題とするのは、大学において行う看護基礎教育における健康教育であるが、この点は、大学の看護教育を行う現場においても十分なものとはいえない。しかし、大学の看護教育におけるこのような健康教育は特に重要だといわざるをえない。自らの精神的・身体的成熟と発達を学び、それを自覚化し、対象化することは、看護を学ぶ者の原点になるからである。こうした自己認識を看護基礎教育の内容とし、その後の看護専門教育の出発点とすることは教育的に有効であるだけでなく、大学の看護教育においては不可欠であると考えるからである。

### 3. 2 看護基礎教育の現状

看護系大学では、学士課程において社会の要請に対応できる資質の高い看護職者、専門的知識・技術とともに、幅広い教養と豊かな人間性、高い倫理観、的確な判断力を有し、医療現場で専門性を発揮しながら他職種と連携をとつて協調して職務を遂行できる看護職者の養成をめざしている。また、看護学の基本的な知識と技術を習得するとともに、看護学に関する思考力や応用力、創造性を養い、看護学を発展させるための基礎的能力を有する人材の育成が求められている。この目標を達成するため、過密なスケジュールのもとでの授業および臨地における実習、多大な課題が課せられ、卒業時に国家試験を受けるプレッシャーなど、学生自身の健康を損なうおそれがある。さらに、高齢化社会や医療ニーズの増加に伴い、看護職の需要が拡大しており、次世代を担う新たな看護職者の確保が追いついていない現状にある。

一方、看護学生に限らず、就学中の大学生は、生活体験が乏しく、主体的に行動することが少ない傾向にある。また、社会人になるために必要である自信がもてない者も多く、いわゆるモラトリアムの時期であるともいえる。加えて、傷つきやすく、他者への配慮を欠き、向上心の低い者などが散見される。

ところが、今日看護職者に求められる能力として、「主体性、積極性、向上心」がますます重視され、こうした資質を育てる教育が必要と文部科学省は提言する<sup>11) 12)</sup>。そのため、例えば、学習者自らが、看護に関する知識および技術を習得して向上させる取り組み、現状に応じて対応して判断する能力を習得して、研鑽を心がけるための気づきの場を提供するなどの指導が実施されている。

そして、看護職者になる大学生には、看護という集団において必要な「協調性、チームワーク、調整力」、人間関係を形成する能力である「対人関係能力、コミュニケーション能力」が必要である。そして、個人として自己確立すると同時に、継続して自己研鑽する意思を育成する教育が求められる。その他、看護学生に求められる能力には、看護の対象の状態を即座に判断して適切な看護を提供する「判断力、決断力、実行力、応用力」、「リーダーシップ」、「創造力」、「自信をもって行動する意識」を習得する必要がある。この取り組みには、常に自己を振り返る内省力を育成することも必須であるといえる。他方、上述の能力習得を評価する取り組みも、学生自身および教育者に必要であるといえる。

### 3. 3 看護基礎教育における健康教育導入にむけた課題

健康教育とは、対象の健康の保持・増進・疾病予防、早期受診・治療、社会生活の回復および生活習慣の改善を目的とした看護職による教育的・啓発的な実践をいう。また、健康教育を目的として計画された事業、メディアの健康番組や広報活動など、目的や内容に応じて他職種と協調して実施される。近年、健康概念の拡大に伴い健康教育のあり方は拡大し、それぞれの健康レベルに応じた教育的支援が重要視されていること、慢性疾患の増加に伴い、健康教育はヘルスプロモーションの中心的要素として位置づけられ、看護職者の介入する機会が増加している。つまり、健康教育の対象は、健康上の問題を有する個人や集団に主眼をおいた、健康の維持・向上、好ましい生活を目指した、必要な知識・技術の習得、好ましい行動の変容を目標としているため、看護を学習する学生自身の身体的・精神的に健康な状態を目指した教育ではないといえる。

論者は看護学生に対して、健康障害を有する成人期にある対象の「健康増進」「疾病予防」「健康回復」「苦痛緩和」を目指した看護を提供できる能力育成に携わっている。具体的には、看護に関する知識、知識に基づいた実践の習得を目指した学内における授業および演習、施設での実習において、看護の対象の健康状態に関する実践能力を育成する教育を担っている。つまり、看護学生が健康な状態を維持するための健康教育ではなく、看護の対象に適切な教育を提供するかという教育を実施している。

しかし、看護学生が自らの健康状態を把握し、健康に過ごすための課題を見出して適切な行動を実践する

能力を習得する教育は、看護学生が自らの健康状態を保持・増進のみにとどまらず、就業後の生活および職場での活動に反映されると考えられる。さらに、青年期にある学生は次世代を担う役割があり、新たな家族を形成する上でも役立つと考えられる。このことから、看護基礎教育において、看護学生を対象とした健康教育を実践する必要があるといえる。特に、大学教育の役割は、専門分野にとどまらず幅広い知識や技能、専門能力の学修を通じて探究力や社会課題の解決能力を育成することで、新たな時代を牽引する人材や社会の中核として活躍する対象を育成して輩出することにつながることから、就学する学生を対象とする健康教育は重要であるといえる。

#### 4.まとめ—青年期の特徴を踏まえた看護基礎教育における健康教育の課題

看護基礎教育における健康教育のあり方を考察する手がかりとするため、看護基礎教育を受ける青年期の発達課題の特徴を照合し、健康教育実施の課題について考察した。

その結果、看護基礎教育を受ける対象である青年期の発達課題の傾向および課題について、内省力や自己を振り返る気づきの機会を設ける必要があることが明らかになった。加えて、基礎看護教育を行う「教育現場」において、教育を受ける対象の特性を理解した、教育のあり方についての検討が優先される課題であることが明らかになった。

文部科学省は、「疾病構造の変化や少子超高齢社会の進展など、医療をめぐる状況は変化に伴い、看護職者には、複雑性・多様性に対応し、タイムリーに判断・対応して総合的な看護を提供する能力が求められている」<sup>10) 11)</sup>と提言している。つまり、看護基礎教育を行う教育現場では、将来を担う看護職者としての能力を習得させる教育、看護を提供する場としての「社会」における人間関係性を習得するきっかけとなる教育現場を設定することが重要である。

このことに加え、看護基礎教育を実施する時期に、看護学生自身が健康に過ごすための知識および実践能力を習得することを目的とした健康教育が必要であることに気づく機会となった。つまり、看護基礎教育において、看護の対象および看護学生の双方の健康に注目する健康教育の実践が今後必要となるのではないだろうか。

#### 注釈

- 1) 世界保健機関 (World Health Organization: WHO) とは、全ての人々が可能な最高の健康水準に到達することを目的として、1948年4月7日に設立された国連の専門機関のひとつであり、全世界の人々の健康を守るために活動を行っている。現在、194カ国が加盟、日本は1951年5月に加盟した。
- 2) ロバート・ジェームズ・ハヴィガースト (Robert James Havighurst) (1900年-1991年) は、アメリカの教育学者である。専門の物理化学から人間発達と教育の問題に取り組み、子どもあるいは高齢者のエイジングへの適応の問題などをテーマとして、教育学や人間発達学の分野でも活動した。ハヴィガーストは、個人が健全な発達を遂げるためには、発達のそれぞれの時期で果たさなければならない課題を設定して取り組む必要があると唱えた。ハヴィガーストの理論は、特定の発達段階における社会的および教育的な課題に焦点を当てており、乳児期から老年期までの各段階で期待されるスキルや行動を示している。
- 3) エリクソン (Homburger Erikson) (1902年-1994年) は、ドイツに生まれ、アメリカ合衆国の活躍した発達心理学者であり、精神分析家である。「アイデンティティ」の概念、エリクソンの心理社会的発達理論を提唱した精神分析家の一人である。人の発達が一生続くという「生涯発達」を唱え、発達段階は乳児期から老年

期までのそれぞれにおいて、取り組むべき発達課題があり、この課題が達成されない場合、ストレス状態や人格形成の未熟さなどの心理的危機が訪れると唱えた。各発達課題において具体的な対応策を示しているため、教育現場や発達障害の支援など、教育的場面や指導が必要な場合に効果的に活用されている。

- 4) ハインツ・コフート (Heinz Kohut) (1913 年—1981 年) は、オーストリアで生まれた精神科医であり、精神分析学者である。精神分析的自己心理学の提唱者として、今日の自己愛研究や間主観的アプローチの端緒を開き、自己愛性パーソナリティ障害の研究に先鞭をつけたとされている。自己心理学とはコフートが創始した精神分析のひとつの学派で、人の自己が周囲から支えられる体験 によって発達することを重視する考え方である。

## 文献

- 1) 鈴木みちえ, 宇野木昌子, 山本るり子, 中丸弘子, 鈴木知代, 中野照代, 顧寿智. 大学生の健康習慣と自己管理スキルおよび生活満足度との関連. 「厚生の指標」第 55 卷 3 号, PP.23, 2008.
- 2) 宮坂忠夫.厚生労働省 Hp. 健康日本 21 (総論) >参考資料 (2024.12.7 確認)
- 3) 岡田みゆき, 安田早織.大学生の健康に関する意識と実態.北海道教育大学紀要 (教育科学編) 第 72 卷 1 号, PP.323-332, 2021.
- 4) 木村美来, 小川真由子. 大学生の健康関連行動とライフスキルとの関係. 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要人文科学・社会科学編第 6 号, PP.113-124, 2023.
- 5) 藤永新子, 原田江梨子, 安森由美. 成人期にある看護学生の健康意識と対処行動 (第一報) . 第 41 回日本看護学会論文集 看護教育, PP 213-216, 2010.
- 6) 藤永新子, 原田江梨子, 安森由美.成人期にある看護学生の健康意識と対処行動(第二報). 甲南女子大学 研究紀要 看護・リハビリテーション学編第 6 卷, PP 69-76, 2011.
- 7) 原田江梨子, 棚田聖子. 看護学生の健康管理に関する文献レビュー. 第 48 回日本看護研究学会学術集会 学術集会. 2022.
- 8) 原田江梨子・阪本美江.青年期にある対象の健康自己管理能力の習得を目指した教育方法に関する文献レビュー. 関西教育学会年報. PP 41-45, 2024.
- 9) 公益社団法人日本 WHO 協会. 健康の定義. [https://japan-who.or.jp/about/who-what/identification\\_health/](https://japan-who.or.jp/about/who-what/identification_health/) (2024, 6,30 確認)
- 10) 世界保険機関(WHO)ライフスキルの定義. <https://www.manabinomirailab.com/aboutlifeskill> (2024,6,24 確認)
- 11) 文部科学省. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会大学における看護系人材養成の在り方にに関する検討会. 第一次報告—大学における看護系人材養成の充実に向けた 保健師助産師看護師学校養成所指定規則の適用に関する課題と対応策—. PP 1-15. 2019.
- 12) 文部科学省. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第二次報告—看護学実習ガイドライン—. PP 1-15. 2020.
- 13) 堀口雅美, 大日向輝美, 酒井英美, 木口幸子, 田野英里香, 稲葉佳江. 基礎看護学における看護倫理教育の検討～本学看護学生の道徳的推論と道徳的発達段階の特徴. 札幌医科大学保健医療学部紀要第 5 卷, PP.25-33, 2002.
- 14) 井上知子, 三川俊樹, 芳田茂樹. 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究(1)—研究方法に関する文献展望—. 追手門学院大学文学部紀要第 23 卷, PP.1-17, 1989.
- 15) 井梅由美子, 藤後悦子, 大橋恵. 成人期における対象関係と発達的变化. 東京未来大学研究紀要第 8 卷, PP.1-11, 2015.
- 16) 石井房枝. 発達心理学における危機の考察. 地域総合研究第 6 卷, PP.7-18, 2006.
- 17) 向後礼子, 豊川輝, 神谷直樹. 青年期・成人期の発達課題に関する考察—就職及び結婚に関する大学生の意識—. 近畿大学教育論叢第 22 卷 2 号, PP.1-14, 2011.
- 18) 中新美保子, 谷原正江, 長江宏美, 大場広美, 太田にわ, 砂田正子, 山口三重子, 留田通子, 福山礼子. 看護学生の心理社会的発達—看護大学生・看護専門性・非看護系学生の比較—. 川崎医療福祉学会誌第 15 卷

- 1号, PP.289-293, 2005.
- 19) 中山留美子, 中谷素之.青年期における自己愛の構造と発達的変化の検討.教育心理学研究第54巻2号, PP.188-198, 2006.
- 20) 中野明徳 H.コフートの自己愛論－自己心理学への展開－福島大学総合教育研究センター紀要第15巻, PP.25-34, 2013.
- 21) 奥田玲子, 深田美香. 看護学生の社会人基礎力の経年変化と影響を及ぼす経験要因. 米子医療第70巻, PP.13-24, 2019.
- 22) 岡田精一. 自我形成と価値観：青年期の人生観. 東京音楽大学リボジトリ第14巻, PP.85-106, 1990.
- 22) 岡田郁子, 泉澤真紀. 看護大学生の向社会的行動と共感性との関連－学年別の傾向－. 保健福祉学部紀要第12巻, PP.11-17, 2020.
- 23) 須長恵子. 成人前期女性のアイデンティティの研究. 創価大学大学院紀要第37集, PP.91-110, 2015.
- 24) 佐藤有耕. 青年期を中心とした発達的研究の動向と展望. 教育心理学報第56巻, PP.24-45, 2017.
- 25) 塚原拓馬. ライフサイクルモデルの再考とキャリア発達支援－青年・成人期以降の発達課題と改訂モデルの提起－. 実践女子大学生活科学部紀要第59巻, PP.13-22, 2022.
- 26) 和田秀樹, コフート心理学入門. 青春新書, 2015.
- 27) 吉森丹衣子. 自尊感情の変動パターンと影響要因の検討. 研究論集第7巻, PP.105-111, 2022.
- 28) 吉村英. 青年期の発達課題が幸福感に与える影響. 京都女子大学院発達教育学研究科博士課程研究紀要「発達教育学研究」, PP.1-13, 2017.

